



福富草子

永代美知代

この草子は御伽草子の中では一番古くからあるものでして、足利時代の特徴のよく寫し出されたものだといふ事です。一體足利時代は上下一般の風義が亂れて、君臣父子の争ひに、天下の騷動やむ時もありませんでした。これは皆、人のその分にあんじないせいなので、自然物羨みを誡めるやうな教訓が必要になつて來たのです。この草子には憚り氣もなく放屁の事が記されてありますが、この時代のものには、折々こんな事を平氣でかいてあるやうです。原文は四五百年前にかゝれたもの

で、中々古雅な文章です。

昔福富の織部と云ふ長者があつた。此者何の因縁か、生れついでの一藝を持つて居た。それがまた至極變妙な藝なので、誰も彼も面白がつて、終にはやんごとなき湯の方々のお耳にまで傳はつた。織部の名聲は忽ち上つて、家倉を建て増し、百姓もしないのに、謝禮に貰つた五穀は庭一杯に積まれてあると云つた有様、織部は福富の楽しい上に、愈々榮えて愉快な月日を送つてゐた。その隣に甚い貧乏暮しの者が住つてゐた。ほくせうの藤太と云つて、女房は十から年上の女で、妻の顔の口の大きな鬼婆とあだなをされてゐた。

『お前さん位藝無しつたらありやしない、大男の癖に口惜しいとも思はないの？ 讀み書きや遊藝が出来なかつて、お隣の福富位な藝なら、習つて出来なかつて事ありやしない。うまくお隣へ泣きついて習つておいでよ、上手に手に入つて御覽、今にお隣の寶をみんな自家へ取込めるぢやないかね。お前さん私の云ふ通りにしなけりや、私も今のうちだ、餘り皺の寄らない

先に離縁し一貫ひませう』

或日、斯う鬼婆から談判されて、藤太は仕方なしに織部の許へ出掛けて行つた。

『毎日々々鬼婆から責められても、何しろお氣の毒で頼み兼ねて居ましたが、こんなに御親切にして頂けるのなら、早く來ればようござんした』

藤太は手をついて頻りに追従めいた事を並べ立てる。織部は心の中で憎らしい男だと思ひながら、古臭い巻物なんかを取出した。

『一體私の藝には大事な薬があつて、それを吞まなければいけません、處でそれが家傳なのだから、めつたに人に仰有つてはいけませんぞ』

そして細々と秘薬の調合方を教へた。

『なる程ね、鬼婆が又何とか云つて急ぎ立てゝも困ります、その薬を少々頂戴して、早速一手柄して見たいと思ひますが……』

『さうですか』

織部は黒い丸薬を二粒持出して、藤太に呉れながら、

下竈に教へた。

『此薬は空腹にのんでは駄目だ、少々お腹をこしらへてから、藝に取りかゝる二時間も前に、鹽湯をぬるませて服みなさい、きゝめのある事受合です。少し位藝が遅れても氣をせかないやうに、鹽の中に水を汲み込んで、お尻を浸けて、ウンときばつて息をお吐きなさい。それからもう藝をよさうと思つたら、息を吞みこむんです』

藤太は大悦びて、丸薬を押し頂いて歸つた。而して莞爾もので一部仔什を話して聞かせると、鬼婆は飛び上つて喜んだ。

『これから直ぐどこか好い上の方の處へお出かけよ、そしてうんと吹くんだね、私は福富の師匠の藤太と申す者ですつてね。本當は私が今此處で一つ試に聞きたいんだけれど、何しろ唯二粒しかない丸薬だから、勿體ないしねえ、兎に角早くいつておいでつたら』

云ひながら妻月の隅つこのつゝらから、古ぼけた鳥帽子、帷子、袴などを取り出して、藤太に着せかけた。

『首をキチンと据ゑて腰をのしでお出でよ』
鬼婆は烏帽子の塵を拂つたり、髪を撫でつけてやつたり、前に立ち後に廻つて眺めた。

『立派な男振ぢや、まるで初めての婿入のやうに見えるぞい!』

藤太は織部から救へられた通り薬をのんで早速出かけて行つた。途中でお腹が筋張つたり引き吊つたりまるで雷のやうにゴロ／＼なつた。だが、藤太はお尻を据ゑながら急いで歩いた。今出川の中將が若くて何かを面白がる方だと云ふ事を聞き知つてゐて、其處へ入つて行つた。すると丁度つれ／＼だとあつて、藤太はお庭の蹴鞠のかゝ



りへ案内された。お吸物だの、御酒だの、いろんな御馳走が出て、中將はお座敷の端近うおでましになつた。おみすの中には叔母御前の尼君や榎臺様や御妹の内侍のかみなどが、すらりとお並びになつて、今か今かとお耳を傾けて放屁の藝をお待ちになつた。

藤太はお腹は痛い、御馳走が氣になつて、したゝかに御酒を頂いた。するうち馬鹿に腰が張つて来て、堪らなく腹が痛んだ。座を立ちかけると運悪く取り外して、すつくり下痢してしまつた。お庭の白沙はまるで山吹の名所井出の玉川も斯うかと思はれる程の光景になつた。急に妙な臭氣が、風につれて

御殿中胸悪く臭つた。桃尻を据ゑて逃げ出さうとする藤太を、御家來が引き据ゑて眞黒なお尻を巻いて打つた。そし、襟髪を掴んで庭から引き摺り出した。袖も袂も血まみれになつた藤太は、眞晝間を耻かしいなりでよ／＼歸らねばならぬ。

鬼婆はそんな事と知らう筈もない、やがて歸つて来る時分だと思つて、門口へ出て見たり、仰上つて見たり、散々待ち兼ねた。遙か彼方から大勢の人に取巻かれながら、赤い小袖を着た藤太が見えて来た、と婆はもう、あたふた家へ駆け込んだ。

『今日からは長者暮しぢや、もうこんな見苦しい古小袖に用は無い!』

云ふより早く火にくべて、メラ／＼と燃してしまつた。其處へやつとこさで歸つて来た藤太を見ると、赤い小袖と見たのは血の染んだ古小袖で、黄色い袴と見たのは、たれ流した穢いもので、婆は手を觸る事も出来ない、鼻をつまんで呆れ返つた。着物を着かへようにも藤太の着物は焼かれてしまつて、着るものもな

い。裸でぶる／＼震へながら、くどく／＼云ひ譯をするのであつた。鬼婆は腹が立つて堪らない、だが流石は夫婦の仲である、敏くちやの手をあて、痛む腹を撫でたり擦つたり、頻りに看病をする。

『南無歸命頂禮三所權現、良人の藤太に耻をかゝした織部の奴を、どうぞ甚い目に逢はしてやつて下さるやうに!』

川邊へ出て水ごりを取つて、鬼婆は一生懸命、恨めしいと思ふ織部を呪つた。その信心の念が通つたか、熊野の方角から鳥が一羽飛んで来た。

『嬉しいや、これで願ひも叶つたらしい』

斯う喜んで歸つた。だが、藤太の腹痛は依然よくならないで、日増しに弱つて行く一方である。婆は氣を揉んで典藥の頭和氣清麿の處に行つて、事情を話して頼んだ。さういふ次第ならと云つて薬を調合して貰つたので、婆はやつと安心したが、考へれば考へるほど織部が恨めしい。如何がなして、憤を晴らして呉れようもの、内々機会を待ち構へてゐる。

此方は織部が、何だか知らない夢見が悪い、卜者に
見て貰ふと、七日の物忌だ、門を閉して、決して他人
に出逢つてはなさんと云ふのであつた。

『何と云ふ窮屈な事だらう、かう云ふ事は神さまが轉
じて下さるものだ、可いさ、お詣りでもして來ませう
よ』

織部は或る朝早く、神詣りに出掛けて行つた。

すると突然鬼婆が出て來て、やにはに織部に掴みか
がつた。さすが織部は男の事だから、その手を無理や
り振りもぎつて逃げ出したが、婆は猶も跡を追つて頬
ぺたにかみかゝらうとするのであつた。

その顔付と云つたら、まるで魍魎鬼神のやうな物凄
い容子で、口は耳の根つこまで裂けたやうにひろがつ
た。さながらいきまぐ蛇體にでもなりさうな怖ろしい
形相であつたといふ。

これが福富草子の概要のお話であります。

(をばり)